



■新田駅のホームから見える田園風景



JR東日本仙台支社
仙台建築技術センター
西島 悠介さん(27)

**設立から127年
地域に愛された旧駅舎**

JR東日本は12月26日、建て替え工事をしてきた東北本線新田駅の利用を開始しました。1894(明治27)年に建設され、改築を重ねながら127年間という長い年月、地域住民や多くの利用者たちに愛されてきた旧駅舎。昨年6月の建て替え開始時点ではJR東日本仙台支社が管理する駅舎の中で、最も古い駅舎でした。

とモノが行き交う物流の中心地として、にぎわいを見せていました。

駅の建て替えに伴い、6月27日には、地域住民が「新田駅舎127年間に感謝する集い」を開催。新田駅前自治会の石川法夫会長が駅の歴史を紹介し、地元の子供や園児たちは「今までありがとうございしました。これからも新田駅を大事にしていきます」と述べ、新田駅舎へ感謝の気持ちを伝えました。

**地域の特色を
イメージした新駅舎**

新駅舎のデザインは、JR東日本仙台支社仙台建築技術センター内でデザインコンペを重ねて決定されました。デザインを考案した西島悠介さん



新しく建て替えられた新田駅

127年とこれからも —新田新駅舎が完成—

建設から127年を迎えた新田駅が令和3年12月26日、新駅舎として生まれ変わりました。今号では新駅舎に込められた思いと旧駅舎での歴史を紹介します。

んは「新田は伊豆沼内沼が近く渡り鳥の飛来地として有名な場所。地元のシンボルでもある駅にその地域の特色を取り入れました」とデザインに込めた思いを話します。外観は、渡線橋(ホーム同士を連絡するために架けられた橋)と対称になるような傾斜にし、渡り鳥が羽ばたくシルエットをイメージしてデザイン。また、正面には丸窓が設置され、白鳥の有機性が表現されています。駅舎内には、右記のとおり梁とベンチにも白鳥をモ

チーフにした工夫が施されているほか、大きな窓を道路とホームの両面に設置することで、伊豆沼へ繋がる水田風景との連続性を保ち、重要景観計画区域に指定されている地域になじむようなデザインになっています。

西島さんは「何度も現地足を運び地域のことを考えてデザインしました。私にとっても初めてデザインを担当した思い出の駅。地域の人たちに長く愛される駅舎になってほしい」と願いを込めました。

■新駅舎内観



白鳥をイメージした梁型シンボル

渡り鳥の飛来地である伊豆沼・内沼の最寄り駅であることから、白鳥をイメージした梁型シンボルがデザインされています。

宮城県産材を使った木製ベンチ

宮城県産材のスギを使い、土台には白、黄、黒と白鳥を連想させる配色が施されています。



1894(明治27)年、開業当初の新田駅